第十章　川越の市制施行六十周年祝賀行事

◆埼玉県で最初に「市」になったのは川越

一九二二（大正十一）年の国民新聞夕刊の見出しは、「芋の川越町がいよいよ市になる。埼玉県では初めての市」で、それは関東大震災の前年のことだった。

一九八二（昭和五十七）年は、市制施行から六十年になるということで、さまざまな記念祝賀記念行事がおこなわれた。その中でサツマイモ関係のものだったのは、川越いも研究会の「川越いも歴史展」と、福原公民館主催の「さつまいもトータル学講座」だった。

一九七一（昭和四十六）年のこと、拙稿「川越いもの作り初め」が埼玉県郷土文化会の「埼玉史談」十八巻四号に載った。それを読んだという川越在住のアメリカ人、ベーリ・ドゥエル先生から、こんな電話があった。

「わたしは川越在住で、そこにある国際商科大学（現・東京国際大学）の英語教師です。同時に上智大学の大学院にも籍を置き、文化人類学の研究もしています。同じ川越の人で、サツマイモ文化のことを調べている人がいることが分かって嬉しいです。

どうです。これからは一緒にその勉強をやりませんか？」と。

わたしも同じ町に、同じことを研究テーマとしている人がいたことが分かって嬉しかった。それでさっそく立ち上げたのが「川越いも研究会」だった。と言っても、たった二人だけの

会では心細い。まずは同志を増やすことにした。
それで仲間になってもらえた人びとは、埼玉県立園芸試験場の佐藤光興技師・埼玉県立川越農業高校の柏俣和夫教諭・砂糖問屋の田中利明社長・元町二丁目の木下雅博自治会長・川越氷川神社の山田勝利宮司・川越市教育委員会の大野正巳さんなどだった。
おかげでにぎやかになった研究会の実力を試すチャンスがすぐ来た。市制施行六〇周年記念行事の一つとして開催した「川越いもの歴史展」がそれだった。その会場は蔵造りの町並みの真ん中にある「蔵造り資料館」で、会期は、九月から十二月までの長期間だった。
その日々の当番は、木下さん夫妻が引き受けてくれた。おかげで本職がある他の会員は、毎日出なくて済んだ。出たのは土曜日の午後や日曜日だけで済んだ。
その代わりになる「川越いもの歴史」という冊子もつくった。その著者は以下のようになっていた。

山田勝利「はじめのことば」
井上　浩「川越芋の歴史」
佐藤光興「サツマイモの素顔」
柏俣和夫「川越地方のベニアカの作り方」
佐藤光興「昭和初期における川越地方のサツマイモ関係資料より」
田中利明「川越名産のいも菓子」
ベーリ・ドゥエル「甘藷の由来」
宮崎　稔「表紙デザイン」
大野正巳「編集」

同展の展示品でもっとも好評だったのは、さまざまなサツマイモ品種の実物と川越名物のイモ菓子だった。それを会場に飾りきれないほどたくさん集めて展示した。

心配だったのは、お客さんの「入り具合」だった。だが、やってみたら毎日、意外なほど多くのお客さんが来てくれた。特に土・日は大入り満員になった。その人たちが口々に、「さすがは川越だ。よくやってくれた」とほめてくれた。

◆ 福原公民館の活躍

川越市内のサツマイモの代表的産地と言えば、福原地区と大東地区の二か所だった。その福原地区の公民館と大東地区公民館の共催事業に、市制六十周年記念の「さつまいもトータル学講座」もあった。

そこにサツマイモをこよなく愛する川越市民が四十人も集まった。その企画者だった福原公民館主事、山田英次さんはその翌々年、講座参加者有志と講師を母体とする「川越いも友の会」を立ち上げた。

それで、できたての「川越いも研究会」は発展的解散となり、「友の会」と合流した。新しい会の初代会長には、「川越いも研究会」の会員だった田中利明さんがなり、事務局長は企画力と実行力抜群の福原公民館主事、山田英次さんとなった。

川越いも友の会は発足当初から、さまざまな事業を展開した。福原地区農家の畑の一部を借りてのサツマイモ栽培実習や郷土料理研究家を招いてのイモ料理つくり。福原公民館での

「川越いも祭」。パンフレットや小冊子の発行。国内では鹿児島県へ、海外では中国とアメリカへのサツマイモ事情視察団派遣。そしてわが国のサツマイモ研究者を招いての学習会などがそれだった。マスメディアが、それを「サツマイモ復権運動」などとして盛んに取り上げてくれた。その活動はそれほど目立つものだった。

◆「サツマイモの日」宣言

川越いも友の会の諸活動で、全国的なものになっているのは「毎年の十月十三日をサツマイモの日とする」という宣言である。

そうなったのは、十月は全国的に見ても、サツマイモ収穫の最盛期になっている。そして十三日は、焼きいも屋の看板だった「クリ（九里）より（四里）うまい十三里」の十三里や、川越と東京間の陸路距離から出ている。

そのサツマイモの日ができたことを喜び、全国的なものにしてくれたのが、全国各地の青物関係業者だった。その十月十三日を、「令和」になった今も毎年、サツマイモの特売日などとして宣伝してくれている。

川越いも文化史の研究は、オンリーツーとしてベーリ・ドゥエル先生と１９８１年より行われた。
（１９８３年、山田英次画）